

て、以下の40項目を観測変量として因子分析¹⁰⁾ (主因子法 VARIMAX 回転¹¹⁾) によって、第1因子から第3因子までの因子負荷量を求める。求めた因子負荷量を VARIMAX (バリマックス) 回転して因子負荷量が得られる。因子得点の計算は回帰法によるものである。結果は表17に示している。

- Q1. 失業の恐れがない仕事につくことができた
- Q2. 高い社会的評価や地位の得られる仕事につくことができた
- Q3. うちの会社は中国の発展のために役立っていると思う
- Q4. うちの会社がイメージ・ダウンになるようなことをおこすと私は困る
- Q5. 昇進や成功のチャンスが多い仕事につくことができた
- Q6. 自分の仕事ぶりを上司から正当に評価されている
- Q7. うちの会社では人事問題は公平だと思う
- Q8. 仕事を進めてゆく上で自分の考えが聞き届けられている
- Q9. 仕事を進めてゆくのに必要な権限を与えられている
- Q10. 高い収入が得られる仕事につくことができた
- Q11. 勤務時間が比較的短い仕事につくことができた
- Q12. 自分の能力が思いきり発揮できる仕事につくことができた
- Q13. 職場でストレスを感じない
- Q14. 仕事の内容や能力にふさわしい賃金が支払われている
- Q15. 仕事を通じて自分の能力や知識を高めることができた
- Q16. 職場での教育・適性を十分につかんでいる
- Q17. 福利厚生や制度や施設が十分に整っている
- Q18. 職場の作業環境 (安全度・音響) が十分に整っている
- Q19. 安全問題について労使の協力はよくおこなわれている
- Q20. 仕事の内容が自分にあっている
- Q21. 仲間と楽しくすごせるような仕事につくことができた
- Q22. 世の中のためになる仕事につくことができた
- Q23. 自分の仕事は単調でない
- Q24. 職場での人間関係はうまくいっている

- Q25. 職場のチームワークはうまくいっている
- Q26. 自分の職場では (QC のような) 小集団活動はなくてはならないものである
- Q27. 自分のすぐ上の上司は仕事について万事やかましいほうである
- Q28. 自分のすぐ上の上司は部下の個人的なことにも気を配ってくれる
- Q29. 通勤に便利な仕事につくことができた
- Q30. 勤務時間外に独自に能力や教養を高めることができた
- Q31. 会社の中の生活に気持のゆとりがある
- Q32. 全体として今の余暇に満足している
- Q33. 自分が住みたいと思っていた地域に職場を見つけることができた
- Q34. 今住んでいるところは住みやすい暮らしやすいところである
- Q35. 隣近所のつき合いもうまくいっている
- Q36. 今後もずっとこの地方で暮らすつもりである
- Q37. 現在の職業生活に総じて満足している
- Q38. 就職や転職に必要な情報 (会社や仕事の内容・勤務条件) が十分に得られる
- Q39. 自分の能力や教養を高めるのに必要な情報が十分に得られる
- Q40. 休日日数が比較的多い仕事につくことができた

観測変量が40個あり、因子分析の妥当性を表す KMO (Kaiser-Meyer-Olkin) 値も0.85732なので、因子分析を行うことは意味がある。Bartlett の球面性の検定においては、有意確立=0.00000 が有意水準 $\alpha=0.05$ より小さいので、「分散共分散行列は単位行列の定数倍に等しい」という仮説を棄却することができる。ゼロでない共分散が存在するという意味で、観測変量間には関連があると言える。

第1因子では、 $Q8=0.56633$ $Q9=0.56138$ といった変数の因子負荷量が大きいので、権限に関することを表していると考えられる。同様に第2因子 ($Q12=0.55552$ $Q20=0.55234$)、第3因子 ($Q24=0.71581$ $Q25=0.72762$) を導く。

- 第1因子 = “職務権限”
- 第2因子 = “能力発揮”
- 第3因子 = “人間関係”

10) 参考：垂水共之他著『新版SPSSX II 解析編1』東洋経済新報社1990 pp.82-109

柳井晴夫他著『因子分析—その理論と方法』朝倉書店1990

11) VARIMAX 回転 (VARIMAX 法) とは、因子に対する解釈が因子負荷量によって確認されるが、その絶対値の各因子について、1と0に近いものに分離することによって、因子の解釈は容易になる。そのため、各因子の因子負荷量の2乗値の分散を最大にするという基準に従い、因子軸に直交回転を行う手法である。